

コリント人への手紙第二1章 「慰めを受けたパウロの心」

1A 苦しみの中での慰め 1-11

1B みこころによる使徒 1-2

2B 人を慰める奉仕 3-7

3B 神の救い出し 8-11

2A 訪問計画にある誠実さ 12-24

1B 神から来る純真 12-14

2B 「はい」のみの計画 15-17

3B 「しかり」である方 18-22

4B 支配者でなく協力者 23-24

本文

コリント人への手紙第二を開いてください。私たちは今日から、コリント第二の手紙を読み始めます。コリント人への第一の手紙が、彼らの過ちを正す手紙だとすれば、第二の手紙は、彼らに慰めを与える手紙と言ったらよいでしょうか。これだけ問題のあったコリントの教会ですが、パウロの心には、彼らに対するあふれるばかりの、キリストの愛がありました。第一の手紙の最後の挨拶に、「16:24 私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように。」とありました。その愛を、自分の心にあるものを、分かち合っていくような、打ち明けていくような内容になっています。

コリント人への手紙第一を、テモテに託してコリントに行ってもらってから、状況はさらに悪くなっていました。前回、第一の手紙の 16 章で学んだように、パウロは当初、エペソでの働きが終わったら、マケドニア経由でコリントに行き、彼らの代表者らと共に、エルサレムの貧しい兄弟たちのところに行く計画を立てていました。

ところが、テモテが、手紙をコリントにいったところ、状況はさらに悪いものになっていました。「12:21 以前に罪を犯していながら、犯した汚れと淫らな行いと好色を悔い改めない多くの人たち」とパウロは、第二の手紙の最後のところで言っています。特に、第一の手紙5章で出てきた、近親相姦を犯している男について、彼らは正しい対処をしていませんでした。ですから、手紙を読んでも、解決するどころか、さらに大きな問題になっていたようです。それで、予定を変更して、マケドニアを経ず、直接、船でエーゲ海を渡り、エペソからコリントに行ったようです。2章1節で、パウロはそれを「あなたがたを悲しませる訪問」と呼んでいます。厳しく対処したようです。そして、今度はテトスに手紙を託します。その手紙は、新約聖書の中には存在しません。第二の手紙2章3節で、「**あの手紙を書いたのは**」と言及しています。そこにも、厳しい処置をうながす内容だったようです。

そして、テトスからその結果を聞きたいと切望しながら、当初の計画を果たします。つまり、エペソからトロアスに行き、そこから船出して、マケドニアに行きます。そして、マケドニアからコリントに向かいます。テトスとは、トロアスで落ち合う予定でしたが、彼が予定の時までやってきませんでした。パウロは、コリントの人たちが正しく自分の手紙を理解してくれたか、とても心配でした。マケドニアに向かい、そこでようやくテトスと会うことができました。彼らの多くが、正しく応答していたのです！それで、彼は深い慰めを受けて、それでこの第二の手紙を書き始めます。罪による大きな混乱の中で、パウロは愛するコリントの人たちに厳しく対処せねばならず、その彼の心の不安も含めて、彼は彼らに大きく心を開いて第二の手紙で分かち合っています。

けれども、まだまだ問題は残っています。多くの人々が正しく対処しましたが、残り的人々はますますパウロに敵対心を抱きました。パウロは、もはや真正な使徒ではないとする者たちがいました。そして、その悪意を煽る、偽使徒たちがその背後にいました。そこでパウロは、まず教会の人々全員に、信頼関係を修復する必要がありました。そして、神に与えられた召命にしたがって、自分の使徒職を弁明しなければいけませんでした。そして、これら羊の中にいる狼である、偽使徒たちに対峙しなければいけませんでした。罪というのは、このように多くの混乱をもたらし、人々の大切な交わりや信頼を壊すような、サタンの策略があります。その壊れかけている信頼を、回復させるべく、パウロは、自分が三度目の訪問をする前に読んでもらおうとして、マケドニアにてこの手紙を書いたものです。

1A 苦しみの中での慰め 1-11

1B みこころによる使徒 1-2

¹ 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

パウロは、コリントの人たちの一部で、彼の使徒職を疑っている人たちがいるので、初めにはっきりと、自分が使徒であることを明言しています。その根拠となるのが、「神のみこころ」であります。主は、パウロについて、キリストの弟子アナニアに、「使 9:15 行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。」主に明確に語られ、召されたという確信があるので、それが自分を使徒としています。パウロは、これまで、数々の困難を受けました。それに加えて、今は、自分が手塩をかけて育て、愛してやまないコリントの人たちから、自分の使徒職を疑われるという問題にも直面します。その困難に耐え、それでも使命を全うする力をくれたのは、まさしく、この召命なのです。「神のみこころ」です。私たちは、キリスト者として、何をしていけばよいのか？以上に、主が何と命じられているのか？ということに心を留めて、その命じられたことに従う生活を送らないといけません。

そして、「兄弟テモテから」と言っています。パウロの同労者であり、パウロと心をつなげている人です。パウロだけでなく、テモテも同じ思いをもって、この問題に対処しています。それから、「コ

リントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たち」と言っています。コリント以外にも、例えば、隣の港町にケンクレアがあります。ローマ人への手紙は、ケンクレアの女執事フィベが、その手紙をローマに携えて行ったことを思い出してください。アカイア全土にも、この手紙が読まれることをパウロは望んでいました。

² 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

挨拶ですね。父なる神と、主イエス・キリストからの恵みと平安です。恵みはカリス、ギリシア人の挨拶言葉で、平安はシャローム、ユダヤ人の挨拶言葉です。これから、神の恵みが、どのようなかたちで現れて行ったのか、パウロは自分の働きに現れた恵みを分かち合っています。それは意外なものです。苦しみを通して、でありました。

2B 人を慰める奉仕 3-7

³ 私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたえられますように。

父なる神への賛美から、パウロは手紙を始めていますが、「あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神」と、神を呼んでいます。これは、パウロがちょうど、テスから、自分の手紙に対してコリントの人たちの多くが正しく応答したことを聞いて、深い慰めを受けていたからです(7:5-7)。罪によって多くのものが壊されていった。しかし、神は憐れみ深く、罪の中で彼らを潰されたままにされることはなかった。そのことに励ましを受けて、すべてのところに神がおられたのだと確信するに至り、この方は慈愛の父であり、あらゆる慰めに満ちた方なのだと思ったのです。

みなさんも、ぜひ、パウロの手紙から慰めを受けてください。その一つは、主の器として、これほど大いに用いられたパウロ自身が、気落ちし、心が不安になっていたという事実です。「7:5-6 マケドニアに着いたとき、私たちの身には全く安らぎがなく、あらゆることで苦しんでいました。外には戦いが、内には恐れがありました。しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テスが来たことで私たちに慰めてくださいました。」実は、私たちが初めて宣教会議に出た時、牧者チャック・スミスが、ここから分かち合ってくださいました。宣教師たちに対する言葉として、あなたがたは祈りが足りない、あなたがたはまだ伝道の努力が足りないとか、叱咤激励でもされるのか？と緊張していましたが、なんと、祈りさえも気落ちしてできないというような、果たして自分はこの地に宣教師として召されたのか？という不安に対して、真っ直ぐに、慰めてくださる神なのだという使信から、話してくださったのです。深い慰めを受けました。パウロは、この第二の手紙で、彼のような使徒の権威が与えられた者も、そうでない者たちも、等しくキリストにあって弱くされている者たちであり、共に協力している同士なのだということを知らせています。

⁴ 神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神

から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

神は、私たちに苦しむことをお許しになられます。しかし、そこには大きな目的があり、ご自身の慰めを知るようにするためです。そして、なぜ苦しみの中で慰めを知るようにさせているかという、他の苦しみの中にいる人々に、慰めることができる働きをするようにするためです。

苦しみというのは、同じように苦しみを経た者が初めて、効果的に慰めることができます。ここで言っている慰めは、単なる同情ではないのです。このギリシア語は、パラクレオ、すなわち、そばにいて援助するというものです。イエス様が、聖霊について、もうひとりの助け主と言われた、助け主と同じ言葉であります。そばにいる、ということ。そばにいることによって助ける、ということです。具体的に共にいることです。共にいるというところにある力は非常に大きな力を与えます。結ばれて、つながっているということ自体が、困難を耐えていく力を与えます。そして、励まし、勧めることです。「ああ、大変なんだねー」ではなく、その人を助けるために、あれこれ具体的に動いていきます。言葉をかける以上に、行動し、励まし、勧める要素があります。ある映画を見た時に、障害者の人が、マラソンの大会に出場し、その横でコーチがいっしょに走って、応援し、力づける場面があったのを思い出しました。そのようなイメージです。

そして、苦しみの中の慰めというのが、同じ苦しみを経たからこそ慰める働きができます。一昨日、ある記事を読みました。覚醒剤などを長年常用して、身も身体もぼろぼろになった女性が、収監されていた刑務所で、いろいろな人の良い話が音声で流れてくるところ、進藤達也牧師の話が流れていたそうです。それで立ち直ることができたそうです。理由は、彼自身が刑務所にいた経験があったので、その言葉が心に伝わって来たのだということ。同じところを経ているからこそ、慰める言葉になっていた、ということです。

だからこそ、苦しみには大きな神の目的があります。苦しみというと、人生の幸福を奪い取った一場面でしかないと思ってしまうかもしれませんが、いいえ、神には大きな目的があります。それが、慰めを与える働きです。ジェレミー・キャンプさんの、映画「君といた 108 日」にそのことが見事に描かれていましたね。奥さんのメリッサさんが、自分が癌で死んでしまうことが、たった一人でも、そのことで救いに導かれる人が現れるなら、価値があるというようなことを言いました。一人ではありませんでした、その後、ジェレミーさんが、彼女の死を経て歌をつくり、それが大ヒットして、ジェレミーさんはコンサートに行けば、そのことを証しして、無数の人々がその証しをきっかけにして、イエス様を信じる信仰に至りました。

⁵ 私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです。

私たちが、苦しみを神の視点から見るべき、もう一つの理由は、それが「キリストの苦難」である

ということです。パウロは、大胆にも、ピリピ人への手紙で、こう書きました。「1:29 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。」先に、パウロはあいさつで、恵みがあるようにと言っていますが、キリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、この方のために苦しむことにもある、ということです。神が、キリストが受けられた痛みをもって、その痛みがあるからこそ、私たちに同情できない方ではなく、憐れんでくださり、私たちを助け、支えることができるのです。ここに恵みがあります。私たちが、順風満帆で、何の不自由もないところに神の恵みがあるのではなく、罪のゆえにめちやくちやになってしまったこの世界で生きていく中で受けている苦しみに、その恵みが働くということです。

⁶ 私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの慰めと救いのためです。私たちが慰めを受けるとすれば、それもあなたがたの慰めのためです。その慰めは、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

パウロやテモテは、単に言葉だけで、彼らを力づけることはできませんでした。彼らの言葉に、慰め、つまり力づける励みがあるならば、それは、彼ら自身が痛みを経て、その痛みの中で神から受けた慰めがあって、初めてその言葉に力が含まれるのです。そして、先に話した、メリッサさんの言葉のように、その痛みがかえって、人々に救いをもたらす証しとなっていきます。そして、先ほど話したように、慰めは、単なる同情の言葉ではなく、「苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれ」というものです。

⁷ 私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと痛みをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

ここで強調しているのは、「ともに」という言葉です。これがパウロとテモテが、彼らについて抱いていた希望であり、つまり、彼らとキリストにあって一つになっている、その信頼関係です。その痛みと慰めを共にすることで、自分たちの結びつきは強められます。いろいろな問題があったけれども、その痛みまた慰めの中で、私たちは共に生きることができている、ということです。今、心がパウロに対して窮屈になっているコリントの人たちに対して、この結びつきを回復したいという願いが、この言葉に込められています。

3B 神の救い出し 8-11

そしてパウロは、彼らを愛してやまない兄弟として、自分自身が受けた痛みをぜひ知ってほしいと願います。

⁸ 兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずにおいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

午前礼拝で、この箇所から分かち合わせていただきました。この苦難は、おそらくエペソの劇場における、大騒動のことではないかと思えます。パウロは、死ぬことを覚悟しました。

⁹ 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

主は、この死を覚悟するほどの苦しみにも、目的がありました。神は死者をよみがえらせてくださる方です。この復活の神を知るために、この方により頼むようにするためにするためでした。私たちは、自分で自分を救おうとして失敗してしまいます。この方のゆえに、自分を捨てる、失うということを経て、それで初めて救われることができます。「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」自分で何とかしてやりくりしようという、肉の知恵が働くと、神は、全くうまく行かせないようにされます。これは、恵みなのです。神は復活の神です。ですから、私たちは自分を生かすのではなく、逆にキリストにあって死なないといけないのです。自分に死ぬと、そこで自分ではなくて、まったくもって神がなされている、という世界が一気に広がります。神の恵みが働くのです。

¹⁰ 神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

信仰生活とは、いわば、神への信頼を増やしていくということでしょう。何度となく、自分が救い出された経験があるならば、それによって、自分は神をより信頼しやすくなり、それで、次に困難が訪れた時に、そのまま神を信頼していくようになります。ロマ 5 章に、苦難も喜んでいとパウロが言いましたが、それが忍耐へ、忍耐が練られた品性へ、その品性によって希望が生み出されると言いました。ただ神に希望を置く人生へと、変えられていきます。

¹¹ あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちが救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

祈りによる協力です。パウロやテモテの福音宣教の働きについて、自分たちだけでできるとは、到底思っていませんでした。パウロは、他の手紙でも祈りを強く、その教会の聖徒たちに要請しています。祈りによって、初めて効果的に福音の戸が開かれるのです。そして、死の危険からも祈りによって救い出されるのです。

それだけではありません。コリントの人たちが祈りによって、パウロたちに神の恵みが注がれます。そうしたら、苦しみの中にある神の恵みを知って、神が祈りに応えてくださったことを知って、それで神に感謝を献げられるようになります。これが、祈りの奉仕の醍醐味です。祈りが、具体的に

祈られている人々の働きを助け、そして、自分自身が神の恵みを知って、感謝を献げられるようになっていくのです。その恵みを共にすることができます。

2A 訪問計画にある誠実さ 12-24

このようにして、苦しみと慰めの中で、彼らと共に生きていることを示しました。次に、具体的に彼らの中にあるパウロに対する疑いや批判に答えていきます。

1B 神から来る純真 12-14

¹² 私たちが誇りとすること、私たちの良心が証していることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、神の恵みによって行動してきたということです。

パウロたちが誇りとしていたのは、このように神の恵みによって行動できたということです。神の恵みとは、受けるに値しない神の好意を受けていることです。自分たちの思惑や知恵ではなく、むしろ自分たちの至らなさにもかかわらず、神が先行して生きて働いてくださっているということです。そこには、神の知恵があります。自分たちの思いを超えた神のすばらしい働きがあります。当然ながら、自分たちの計画を、神はあざ笑うかのように無き物にしたり、変更されたりします。パウロは、マケドニアを経てエペソに行くということを、第一の手紙に書きましたが、結局、船でエーゲ海を渡って、コリントに行ったのです。計画を変更したのですが、そこには、神の恵みが働き、人々が悔い改めに導かれていったのです。

そうした神の恵みの世界に必要なのは、「神から来る純真さと誠実さ」です。神の恵みを受けている人々には、そこに計算が働きません。偽りもありません。「純真」というのは、「そのまま」と言い換えることができます。主が語られたまま、行動に移した。主が行われたことを、そのまま信じる。そして次に、「誠実」ですが、このギリシア語の元々の意味は「ろうがない」という意味です。「ろうそく」のろうです。偽りや隠し立てがないということですね。かつて、彫刻を作成している時に、欠けてしまった部分があれば、それをろうでごまかしました。しかし、夏になれば、それが溶けて、欠けが露わにされてしまう、というようなものです。肉の知恵で、あれやこれやと考えるのではなく、いや、考えたとしても、神の恵みがまさっていく世界です。それに身をゆだねるのです。

¹³⁻¹⁴ 私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

パウロが書いた第一の手紙にある計画とは、違うことをパウロは行ったので、それでコリントの教会の中に、何か深い意図があって、企みがあるのではないかと疑いかかったのです。しかし、

パウロは、純真な思いで、誠実に行動計画を書きました。そこに偽りはないのです。読んで理解できる以外は何も書いていないのです。書かれてある明白な意味を受け取ればよいのです。それを疑心暗鬼になって、「いったい、それはどんな意味なのですか！」と疑い深くなる必要はないです。

そして、パウロたちが彼らに対して抱いている誇りを分かち合っています。それは、「主イエスの日」です。主が再び現れて、教会を空中にまで引き上げ、主はご自分の御座によって、私たちが裁かれます。裁くといっても、罪定めではなく、褒美として報いを与えるところの裁きです。そこで、パウロたちは、コリントの人々のことについて、神が褒美を与えてくださることを期待しているのです。この人たちこそが、自分たちが主に対して献げた、愛する人々なのです。自分の愛する人々を、他の人たちの前で誇りたいですね。それと同じです。パウロは、テサロニケの人たちのことについて、こう言いました。「Ⅰテサ 2:19-20 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。20 あなたがたこそ私たちの栄光であり、喜びなのです。」

それで、今度は、コリントの人たちが自分たちの誇りであってほしいと願っています。パウロやテモテなどの働きで、自分たちは今の自分になっている。神の恵みによって、と言えるようになってほしいということです。それだけのことを、事実、神はしてくださっています。それを、あえて自分の心を窮屈にして、認めないままにいるというようにしてほしくないというパウロは思っています。すばらしい、神の畑と、そこで働く人々の間にある信頼関係を、無駄にする必要はない、ということです。

2B 「はい」のみの計画 15-17

¹⁵ この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二度得られるようにと計画しました。¹⁶ すなわち、あなたがたのところを通過してマケドニアに赴き、そしてマケドニアから再びあなたがたのところに戻り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。¹⁷ このように願った私は軽率だったのでしょうか。それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

パウロは、第一の手紙を書いた時に、主がお許しになるなら、という但し書きで、この計画を書いています。それだけでなく、現に今、改めてトロアスからマケドニアへ、そしてマケドニアからコリントに行こうとしているのです。軽率ではありません。また、人間的な計画でもありません。つまり、マケドニア経由を言いながら、実は隠れた動機があって、彼らに抜き打ち訪問をしたのだ、脅しにやってきたのだということでは、決してないのだよ、ということです。

そのことを説明するために、「「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。」と言っています。これは、主イエスが、山上の説教にて、誓ってはならないと言われて、「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」でありなさいと言われました。つまり、何か口でこうこうします、と誓う必要はなく、偽りのない言葉をそのまま語りなさい、ということです。

3B 「しかり」である方 18-22

¹⁸ 神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である、というようなものではありません。¹⁹ 私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。²⁰ 神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

パウロたち、彼の他に、第二次宣教旅行で同労者であったシラスがいます。そして、今も同伴しているテモテがいます。彼らが宣べ伝えていた、神の子キリスト・イエスは、「はい」あるいは「しかり」しかないので。ラオディキアの教会に対して、イエス様はご自身をこう言われました。「黙3:14 また、ラオディキアにある教会の御使いに書き送れ。『アーメンである方、確かに真実な証人、神による創造の源である方がこう言われる——。』この方には、真理、真実、忠実しかないということです。また、この方において、あらゆる約束が実現しました。私たちは、ただ、この方に対して、「アーメン」としか言えず、それで神に栄光をお返しするのです。こうした主を信じ、宣べ伝えているのですから、「はい」と同時に「いいえ」となることはないのです。

イエス様には、偽りやごまかしがないことは、主ご自身のことばを見ればわかります。「まことに、まことに、あなたに言います」という言い回しを、何度、使われたことでしょうか。それは、アーメン、アーメン、と訳すことのできる言葉です。アーメンとは、まことにその通りだという意味です。そして、主は黙示録において、何度となく、「真実で正しい方」と呼ばれています。主が再臨される時に、「確かに真実な方」という名がつけられています(19:11)。そして、花嫁である教会に対して、「22:20 しかり、わたしはすぐに来る。」と言われ、花嫁は、「アーメン。主イエスよ、来てください。」と答えています。私たちが、礼拝を献げということは、まさに、アーメンということに尽きます。この方の真実や確かさに対して、霊において、その通りです、と受け入れていくということでもあります。

²¹ 私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。²² 神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

今の、イエス・キリストにある証言、確信は、神の油注ぎによって与えられています。パウロなど、働き人に、上からの油注ぎがあり、そのために、キリストのうちに堅く自分たちを保つことが許されます。そうした油注ぎがありますが、聖霊が、そこに証印としての働き、補償としての働きをしてくださるのです。証印というのは、所有者が自分の所有物に、ろうを垂らして、自分の指輪にある印章を押し付けることを言っています。そして保障とは、頭金のことです。必ず神が、あなたがたを贖うよという本気度を、予め、御国の祝福の一部を御霊によって与えらえることによって、示しておられるということです。(エペ 1:13-14)

このように、イエス・キリストが父なる神の忠実な証しを立てて下さり、その方にはアーメンしかなく、そして、そのことを確認の印として押して下さっているのが、聖霊なのです。ですから、私たちが神の宮であるならば、聖霊の宿られる宮であるならば、アーメンであられるイエスがおられ、真実と誠実さ、つまり、偽りやごまかし、へつらいがないようにされていくのです。肉の知恵ではなく、神の恵みのみになっていくのです。私たちはそこで、清められます。清められなかったら、私たち自身が取り除かれて行ってしまいます。自分の肉の知恵、ごまかし、二心、そういったものが、アーメンと応えていくなかで取り除かれていくのです。偽りの中に居続けたら、自分自身が交わりの中にいられなくなってしまうのです。これが、教会における聖霊の働きです。

4B 支配者でなく協力者 23-24

²³ 私は自分のいのちをかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりからです。²⁴ 私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

パウロは、この時点でマケドニアにいると思われます。すぐに行こうと思えば、アカイアに行けるのですが、この手紙をまず送り、その手紙を受け取り、彼らの心が整えられるのを待っているのです。彼が遅れているのではなく、計画を変更したのでもありません。

そこで、とても大事なことを話します。コリントの人たちに今、必要なのは、信仰に堅く立つということです。彼らは、第一の手紙でキリストにある幼子と、パウロは呼びました。信仰がまだ成長していない状態だったのです。それで、パウロがそこに行くということが、彼らにとっては、何か強制される、脅される、支配されると感じてしまうのです。実はそうではなく、パウロの心は開かれていて、窮屈にしているのは彼ら自身なのです。信仰が堅くされて、しっかりと立つことができているからこそ、彼らは、パウロたちが助けようと思っているものを受け取ることができるのです。パウロの願っているのは、彼らが偽りのない喜びに満ちることです。そのお手伝いをすることです。しかし、そこでは、信仰に堅く立っている、ということが必要なのです。